

# ARCADIA

77  
WINTER 2019

## Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

## INFORMATION

### ■平成30年度収蔵品展

#### 暮らしのうつりかわり

平成31年1月26日(土)～平成31年3月24日(日)

□子どもわくわく!教室(小学生対象)

日時:2月2日(土)、9日(土)、16日(土)、23日(土)、3月3日(日)

いずれも午前10時30分～正午

担当:当館学芸員

場所:当館1階展示室

□茶の間でかるた大会(小学生対象)

日時:2月9日(土)、23日(土)、3月3日(日)

いずれも午後2時から2回開催、1回8人程度

(当日午後1時45分から先着順)

場所:当館1階展示室内 茶の間

### □展示説明会

日時:2月16日(土)、3月9日(土)いずれも午後2時～

担当:当館学芸員

場所:当館1階展示室

### 書類の話

11月の中頃、書類を書いていた。毎年定期的に出す書類である。書く項目は決まっているのだが、書いていふと思った。何か似たような書式のもを古代の資料で見たとがある。考えてみると、平城京に勤めていた高屋連家麻呂という人物について書かれた木簡であった。「少初位下高屋連家麻呂年五十右京六考日并千九十九六年中」、そう書かれていた。高屋連家麻呂は年齢五十、平城京の右京に住み、六年間に千九十九日出動して、評価は中、意味はそうである。その頃の紙は貴重品であったため、管理が楽である木簡が広く使用されていた。今でいうデータベースである。彼がどのような人物であったのかはよくわからないが、官位と名前、住所と出勤日数と評価は千年以上経った後も残された。翻って考えてみると、自分が書いた書類も記録されて保存される。彼と同じようにまた千年後に博物館などで展示されていてもなら不思議ではない。その時に未来の人たちが見た時にどう思うのかと考えると、たまったものではないというのが正直なところであるが、博物館の「集める」「伝える」という役割は変わらないであろう。そうなるも仕方ないとは思ったが、少し手直しを試してみた。(内)

### おしゃべり、あれこれ。

### 旅のスズメー新たな年にー

いよいよ平成も終わりを告げ、まもなく新たな時代を迎える。ここ数年運氣が良くなかったの、時代の節目を迎えるにあたり、心機一転、新年早々祈りの旅に出た。向かった先は大阪の姫嶋神社(やりのなおいし神社)。御祭神の阿迦留姫命は、虹色の光より生まれた赤い玉より出ずる神で、夫の慢心に耐えかねて海を渡り、新天地で裁縫や焼き物、音楽などの才能を生かして再出発した「決断と行動の神」である。社自身も大阪空襲の焼け野原より再起したこと、から、「やりのなおいし神社」として信仰を集めている。本殿に参拝後、絵馬に願い事を記し、赤い「断ち玉」に願いを叶えるために断ち切らなければいけない事を念じ、境内の石碑の上部に空いた穴に投げ入れる。一回目は失敗、再度心を整えて念じた後、二回目で通り抜け成功!玉が通り抜けるとともに、不思議と晴れやかな気分になった。願いが叶うかどうかは、阿迦留姫命と同様に自分の決断と努力次第。参詣は自分を見つめ直し、気持ちを新たにすればいい機会となった。近日中に八百万の神が集い、万物の縁を結ぶ出雲大社へも参詣する予定である。新たな年が私に、そして皆様にとって良い年になりますように。(浦)

編集後記 | 平成30年(2018)度、最後の展覧会「暮らしのうつりかわり」では、懐かしくまた新鮮に映る明治・大正・昭和の生活の品々を、幅広い年代の方にそれぞれ楽しんでいただいています。展示室の壁高くまで貼られた観光地のペナントは初お目見えで、話が盛り上がって好評です。(小幡)

表紙図版:昭和30年代茶の間の風景再現(平成29年度展覧会の様子)

OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第77号 2019年2月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA

## 眼の極楽②6 花と鳥のかたち

館長 榊原 悟

王朝の虫たち

もとより王朝人の花園に棲む虫が、秋に鳴く虫のみに限られるものでもない。蟬（ひぐらし、空蟬）や蝶（胡蝶）、螢、蜻蛉（かげろう）、はたおり（きりぎりす）に蟻、みのむしなども居たに違いない。「枕草子」蟲は「の段に、その名が上げられ、『源氏物語』の帖名、いわゆる源氏名にもなった虫たちである。それらの虫もまた、松虫や鈴虫などのように野に分け入り採集され、前裁に放たれたのか否か疑問だろうが、こうして名を上げられる以上、王朝人の眼が、これらの虫たちにも向けられていたことは疑いない。彼らもまた王朝人の花園の住人たる資格は充分であった。

むろん、そうした虫であればこそ、歌にも詠まれている。

ものおもへば沢のほたるも我身より あくがれいづる玉かとぞみる

「あらざらむこの世のほかの思い出に」と共に最も人口に膾炙した、和泉式部を代表する一首だろうが、ここにみるように螢のひかりを、燃えいづる魂（恋のおもひ）と重ねるのが歌の世界での常套法らしく、

つつめども隠れぬものは夏虫の

身よりあまれる思ひなりけり

〔大和物語〕四十段）

と歌う一首もある。しかも螢は鳴かないだけに、

音もせでおもひにもゆる螢こそ 鳴虫よりも哀成けれ

源 重之

と、いっそ声高に訴える鳴く虫よりもあはれを催させると云う（この場合の鳴虫は夏に鳴く虫＝蟬のこと）。

そう云えば、「花ぞののこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ」（『源氏物語』胡蝶）と詠まれた蝶についても、王朝人は、

うき世にはながらへじとぞおもへども

しぬてふばかりかなしきはなし

赤染衛門

はかなくもまねく尾花にたはむれて

暮行秋をしらぬてふ哉

源 仲正

郎氏以来、先学の述べるところだが（家永三郎著『上代倭絵全史』改訂版第十一章上代倭絵の特質 墨永書房 一九六六年、武田恒夫著『近世初期障屏画の研究』序章第三節画障屏画の動向 吉川弘文館 一九八三年）、果たしてどうか。もとより花鳥画全盛の近世初期とは較ぶべくもないだろうが、王朝期にも花鳥画はやはり描かれていた、と思う。むろん、そう推定する理由もある。

その第一は、「延喜式」（延長五年・九二七完成巻二七「内匠寮」の屏風絵制作について述べた記事である。屏風の材料や構造、制作に要する手間などを具体的に言及する点、古屏風を知る上できわめて貴重な証言であるが、そこで事例として上げた屏風の絵は、「鷹井草木之類」であった。まさしく現在のわたしたちが云うところの花鳥画である。そうした絵が早くも王朝期・十世紀に在ったことは間違いない。

いや、それだけでない。画中障子ではあるが確かにそうした花鳥画を伝えてくれる作例もある。王朝期花鳥画の存在を推定させる第二の理由である。その画中障子絵とは『後白河法皇像』（妙法院藏）の後白河院の背後に立つ廻された障子絵である（図1）。そこには太湖石風の巨岩（寿石）咲き誇る牡丹、番の尾張鳥と蝶が描かれているのではないか。これら二つの史・資料から、王朝期の花鳥画がどれほどの広がりをもっていたのかは不明であるが、存在していたことは間違いない。王朝期、花鳥画は決して不振の一語ですむものではなかった。

注目すべきは、その問題の画中障子絵である。牡丹に蝶である。蝶と云えば、和歌の世界では、はかない命を思わせるモチーフであったはずだ。ここでの蝶がもしその意味をもつのであったなら、たとえこの画像が法体像で右手に経巻、左手に珠数を持つ遺像であったにしても、源平を手玉にとった大天狗＝一代の権力者・後白河法皇（一二七～九二）の背景を飾る障子絵に取り上げるものとして全く相応しくはない。むろん、この蝶がはかない命のしるしであるはずもない。要するに和歌の世界の住人ではないと云うことだ。となるとこの蝶は、そして牡丹や尾長鳥はどうして描かれるに至ったのか。

それを知る手掛かりも『延喜式』の「鷹井草木之類」屏風についての記事にあった。その問題の屏風は「高五尺」の所謂五尺屏風であったと云うではないか。九世紀、五尺屏風と云えば唐絵屏風に用いられた画面の形状であったはずだ。「唐絵」とは、当時、日本の事物・風景や風俗を描いた「やまと絵」に対して、その名の如く中国の題

と、自らのそれも含め、そのはかない命に思いをはせる。わずかの作例に過ぎないが、これらを通じてみる限り、どうやら王朝人が歌に詠んだ虫たちは、彼らの恋の思いや、もののあはれ、はかなさの心を仮託するための存在としてのそれであって、決して虫そのものを詠んだのではなかった、とみるべきだろう。

そう思ってみれば、逆に『枕草子』が「春はあけぼの」で、

夏はよる。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。

と述べた清少納言の螢を見る眼は、実に新鮮だ。闇夜に飛び交う螢の光を、あくまで純粹に面白くも美しい、と見たのである。そうした清少納言の虫を見る眼は、

とこなつのあたりは風もどかにて 散かふものはてふのいろいろ

と詠んだ寂連（一二〇二）にもあったと思うのだが、どうだろう。

もちろん蝶を「散りかふ」葉に準えようとしたところなど、蝶と云えばはかない命を思う王朝人の伝統的見方が、なお流れていることは疑いあるまい。しかし歌では「散りかふ」ものはあくまで蝶であったと云い、その空を舞う姿から「散りかふ」葉を連想したわけで、そこには蝶の飛ぶさまそのもの、その生態を見つめる確かな眼があったはずだ。まさしく光る螢を「をかし」とした清少納言と同様の視線である。寂連の眼にもそれがあつた。とは云えそうした虫を見る眼は、当時にあつては、なお例外的かつ限定的であった。

となると鈴虫はじめ歌で虫を詠ずることは少なくなかったものの、虫の姿、形そのものを見つめ、それを絵に描くことは思いのほか、と云うよりきわめて少なかったのではなかっただろうか。しかもこの時代、虫だけを単独で取上げることなどあるはずもない。草花などと共に、つまりは王朝人の花園の中に棲む姿で描かれたはずだ。だがそうした「花園図」すなわち「花鳥図」が本格的に描かれるのは、はるか後のことで、上代（王朝期）やまと絵における花鳥画の不振は、これを最初に指摘した家永三

材を扱った絵のこと（秋山光和「平安時代の『唐絵』と『やまと絵』」上・下『美術研究』120・121号 一九四一・四二年）。つまり「鷹井草花之類」屏風は唐絵屏風であったと云うに他なるまい。むろんその図は、舶載された唐代花鳥図を範として描かれたのだろう。

その意味でも見逃し難いのは、『後白河法皇像』のあの画中障子絵「牡丹に蝶・尾長鳥図」である。興味深いことに、この絵の図樣的典拠も、唐代から宋代までの時代については、さまざまに見解が分かれるようだが、中国・花鳥画にあると考えられている点である。むろんこれもまた唐絵である。しかもその唐絵が「牡丹に蝶」、太湖石風の岩まで配しているのである。

そう云えば、これと全く変らない「牡丹に蝶」の図様が、『華嚴宗祖師絵伝』

## ESSAY

（高山寺藏）のうち「義湘絵」巻二の、新羅の僧義湘が入唐し、長安に至る場面にも描かれていたはずだ（図2）。牡丹は富貴の花として、まさしく中華そのものと云うのだろう。蝶は「耋」（八十歳のこと）と音通するところから長寿の象徴である。となれば「牡丹に蝶」こそは、権力者・後白河院の背後に立つ障子絵にぴったりの図様であるのだが。むろん、これを描いた絵師が、そのことを承知していたか否か。しかし、いづれにせよ、これら二つの「牡丹に蝶」が、中国（唐・宋）より舶載された図様に基づいて描かれたことは疑いない。実際、そうした舶載花鳥画模写を伝える史料もあるからだ（未完次号に続く）。



図1 「後白河法皇像」より



図2 義湘絵「華嚴宗祖師絵伝」より

企画展

# チェコ・デザイン 100年の旅

小幡早苗



図1 ラディスラフ・ストナル《耐熱ガラスのティーセット》1931年

チェコはヨーロッパの中心に位置し、歴史的に様々な文化に触れてきました。国土は日本の約五分の一で、約一千万人の人々が暮らしています。緑豊かな自然と資源に恵まれ、高い技術を誇るガラス工芸をはじめとする産業が発達しました。一六世紀には神聖ローマ帝国のハプスブルグ家が王となり、一時はプラハに帝都が置かれたことにより、洗練された芸術文

をはじめとして、チェコ。皆様は、「チェコ」と聞いて、何を思い浮かべられるでしょうか。ビールが美味しく一人当りの消費量が世界一であること、美しい精緻なカットのボヘミアン・グラス、スメタナの『わが祖国』やドボジャークの『新世界より』などの交響曲、「百塔の街」「千年の都」と称される世界遺産のプラハの街並み。伝統的なもののみならず、カレル・チャペックの著書『R.U.R. (Rossumovi univerzální roboti)』が元となった「ロボット」という言葉や、オットー・ウイフェル博士の開発したソフトコンタクトレンズといった先端的な発明は、チェコで生まれ、世界で、また日本でも身近なものとなり、日常に入り込んでいます。

## EXHIBITION

今回の展覧会は、チェコ国立プラハ工芸美術館の収蔵品を中心に、こうした幅広い魅力を持つチェコの文化をデザインの視点からたどりませう。チェコ国立プラハ工芸美術館 (Uměleckoprůmyslové museum v Praze/The Museum of Decorative Arts in Prague) は一八八五年に設立され、現在の美術館の建物は、プラハ市内を流れるブルタヴァ川のほとり、一九〇〇年にヨゼフ・シュルツの設計によるネオ・ルネッ

化が醸成されていきました。また、チェコ語が使い続けられた人形劇などにより、独自の文化・民族性も育まれていました。産業と文化の発達により、一九世紀に世界の富が集中した黄金の都プラハを拠点に、二〇世紀には次々と芸術運動が開花していきます。チェコ・キュビズムとして結晶体や幾何学的形態を建築やインテリアの立体物にまで展開した独特の芸術様式も生まれました。そして戦後、社会主義の時代にも、柔らかな色合いをした優美なスタイルの生活用品や自由な表現の絵本やポスターが創作されています。



図2 ヴァーツラフ・シュバーラ、小箱《悪魔》1921年

ランス様式で建築されたものです。コレクションはガラス、陶器、織物、家具、時計、装飾品、グラフィック、写真と多彩で、古代から現代までの収蔵品は約五〇万点を誇ります。その収蔵品の中から、一九世紀末のオール・ヌーヴォーの旗手であるアルフォンス・ミュシャから世界中で愛される現代のアニメーションまで、一〇〇年にわたるデザイン史を代表する家具、食器、ポスター、おもちゃ、書籍など約二五〇点を紹介します。時を超えて日常を彩り、人々の人生を豊かにしてきたチェコのデザインを、このたび日本で初めて総合的に紹介します。洗練のボヘミアン・グラスや温かいぬくもりのある木のおもちゃなど、きつと心に触れるデザインに出会える展覧会です。

図1、2とも：チェコ国立プラハ工芸美術館蔵 Collection of The Museum of Decorative Arts in Prague

会期：平成31年4月6日(土)～5月19日(日)

古い家財道具を「民具」とか「民俗資料」と呼んで、博物館や資料館は「生活文化財」「民俗文化財」として集めて、調べて、保管しています。美術博物館では、昭和三〇年代半ば頃から岡崎市へ寄贈されていた民具を、平成八年の開館と同時に収蔵品として保管し、それ以来、収集活動を続けています。

今回で7回目を迎える収蔵品展(暮らしのうつりかわり)は、長年にわたり多くの方々から寄贈していただいた、働き終えた道具たちの年に一度の晴れ舞台です。明治から昭和にかけての生活・生産道具を中心に紹介しながら、私たちの暮らしがどのように変わってきたのかを振り返ります。また、郷土の暮らしを伝える身近な文化財の公開・活用の場とし、後世へ伝えることも目的としています。

## EXHIBITION

この展覧会により、美術博物館から寄贈者の皆さまへ、感謝の気持ちをお伝えするとともに、私たちの暮らしや身近にある品々を見直すきっかけのひとつとなれば幸いです。

# 収蔵品展 暮らしの うつりかわり

伊藤久美子



縄巻

会期：平成31年1月26日(土)～3月24日(日)

## 二〇一九年度開催の展覧会

チエコ・デザイン100年の旅  
四月六日(土)～五月九日(日)

ヨーロッパの中心に位置するチエコ。豊かな自然に囲まれ、様々な文化が行き交う中、美しいカットのボヘミアン・グラスをはじめとした産業も発展しました。その首都プラハは、一九世紀に世界の富が集中し、チエコ・キュビズムなどの芸術運動が開花しました。本展では、チエコ国立プラハ工芸美術館の収蔵品を中心として、一九世紀末のアルフォンス・ミュシャから現代のアニメーションまで、なつかしさと斬新さの幅広い魅力を持つチエコの文化をデザインの視点からたどりま

### 琉球の美

六月二日(土)～七月五日(月・祝)

琉球は中国を中心とするアジア文化圏をつなぐ交流のかけ橋として栄え、独自の文化が発展しました。この展覧会では「国宝 琉球国王尚家関係資料」の美術工芸品をはじめ、沖縄県内で所蔵される琉球漆器と琉球独特の衣装である紅型ベニガタ、琉球王国の多彩な美をこ

紹介します。また、岡崎出身の地理学者志賀重昂が沖縄から持ち帰った、首里城北殿に掲げられていた扁額を合わせて展示します。

### キスリング

七月二七日(土)～九月六日(月・祝)

ポーランドに生まれた画家のキスリング(一八九一―一九五三)は、第一次大戦前後にパリに集まった画家たちによる「エコール・ド・パリ」を代表する画家のひとりです。一九二〇年、パリに出たキスリングは、モンマルトルの共同アトリエ住宅・パトールラヴォワール(洗濯船)に住み、制作を行いました。このアトリエではモディリアアーニ、ブラックらと交流し、一九二三年にモンパルナスに移った後、ピカソやステイン、パスキン、藤田嗣治らと親交を深めます。またエコール・ド・パリの中でも比較的早い段階で成功をおさめ、その人柄から多くの人々に慕われました。本展では、肖像、花、風景、裸婦、静物など、画家の制作と展開を概観できる様々な主題の作品を紹介します。

## 二〇一八★武拾九年間バスポート会員限定企画 よりみち美術館〜奥三河のスズメ

今井智子

今回はどこへよりみちするものか悩んでいましたが、とりあえず西へ行ったから次は東かな。

下見に向かったのは新城市。阿寺の七滝、四谷の千枚田、鳳来寺山。見どころが沢山あつて決めるに決めきれず苦労しました。近いはずなのに遠くに来たような感覚になり、かつ行きかけたけど行ったことがないそんな場所を探して、一人でかなりうろつきました。

今回のよりみち先は、新城市設楽原歴史資料館↓道の駅もつくる新城↓長篠城址史跡保存館↓鳳来寺山自然科学博物館↓鳳来寺山(鳳来山東照宮、鳳来寺本堂)。

盛りだくさんの企画となつてしまいました。定員以上の応募をいただき抽選を経ていよいよ当日。

その日は絶好のお出かけ日和で、私の舞い上がった頭を、冷やしてくれるちょうどいい涼しさの空気。市公用バスで出発です。

よりみち先では長篠・設楽原の戦いで武者のなきがらを埋葬した場所に立ち、学芸員の方の解説を聞きました。一万を超える戦死者の供養は今も伝わる火おんどりとして大切に受け継がれ元はなきがらにたかる蜂を追いはらうこ



よりみち美術館

とから始まったと…。今までたどってきた歴史があるからこそ今の自分があるのはわかっていても何だか考えさせられました。

鳳来寺山では一部の参加者さんと地元ボランティアガイドの方の説明を聞きながら二四〇〇段の石段をのぼりました。私は登りきる前からへろへろになっていましたが、昔は二四〇〇段の石段を通学路にしていた子もいたと聞き、先人の偉大さに驚かされました。息が上がつた分、鳳来寺山の澄んだ空気をたくさん吸い込むことができ、なんだか心が軽くなる感じがしました。日差しがよく当たるところは樹木が赤く色付いていて秋を感じつつの鳳来寺山の散策ができました。行く先々で、奥三河の歴史と自然を感じ、スッキリした清々しい感じの疲れ。最後の挨拶をバス車内でさせていただいた際、温かい拍手につつまれ次回企画への活力をもらいました。さて次はどこへ行くか。

## EXHIBITION

### 鶴田卓池と三河の俳諧

―蕉風俳諧の系譜―

九月二八日(土)～二月二〇日(日)

江戸時代後期、松尾芭蕉の流れをくむ鶴田卓池らが三河の俳諧をリードしました。鶴田卓池は岡崎菅生に生まれ、紺屋を業とするかたわら俳諧に打ち込み、三河俳諧のリーダーとなりました。その俳諧は多くの支持者を得て三河をはじめ、遠州にも多くの門人を擁しました。全国的にも名を馳せ、俳諧天保四老人の一人にも挙げられています。本展では鶴田卓池を中心に、三河の俳諧に影響を与えた松尾芭蕉、卓池の師である井上士朗をはじめ卓池門人の俳諧資料を紹介し、三河俳諧の広がりについて考えます。

### 内藤ルネ

二月三日(土・祝)～三月三日(月・祝)

岡崎市出身のマルチクリエーター・内藤ルネ(一九三二―二〇〇七)は、戦後の少女雑誌「ジュニア それいゆ」(ひまわり社)の表紙をはじめ、ファッションやインテリアのデザインなど領域横断的に活動

を展開しました。日本中の女性たちを虜にしたルネの世界観は、現代の「カワイイ」文化のルーツであり、今日でもその影響を窺うことができます。本展では、生誕の地、岡崎でのエピソードを掘いながら、貴重な原画・作品と共に人間ルネに迫ります。

### 暮らしのうつりかわり

二月二五日(土)～三月三日(日)

所蔵品より、明治から昭和にかけての生活・生産道具を中心に紹介しながら、私たちの暮らしがどのように変わってきたのかを振り返ります。長年にわたり、多くの方々から岡崎市へ寄贈していただいた資料の公開・活用の中でもあり、この時期の公立小学校三年生の社会科「古い道具と昔の暮らし」への学習支援を兼ねて、子ども達の見学に配慮した内容と工夫を凝らします。働き終えた道具たちの年に一度の晴れ舞台をお楽しみください。

## 菅江真澄シンポジウム

堀江登志美

平成三〇年九月二九日、秋田市で開催された菅江真澄シンポジウムに行ってきた。同シンポジウムは秋田県立博物館企画展「菅江真澄 記憶のかたち」の関連イベントとして開催されたもので、同年六月に岡崎で開催されたシンポジウムに続く菅江真澄没後一九〇年記念の行事である。東北各地をはじめ全国から参加があり、三〇〇人ほどの盛況な集まりであった。

真澄は岡崎で育った人物である。天明三年(一七八三)に三河を出立、信濃を経て、東北、北海道を旅しながら秋田を終焉の地とした。各地の風俗を文書や絵で書き留めて民俗学者の先駆者となる。和歌を交えながら記した日記や記録、地誌は民俗学のみならず歴史学の資料としても評価できる。

真澄の岡崎での足跡はわかっていないのが現状である。安永六年(一七七七)二月、遠江二俣の内山真龍を訪れた時に内山は、岡崎伝馬町の真澄が来たことを記しており、伝馬町を居所としていたようである。安永九年(一七八〇)八月二日には岡崎伝馬町国分家の市隠亭で観月の宴に招かれて、和歌を詠んでいる。この時の経緯を自ら書いた文章は当館で保存している。天明元年三月に

は明大寺成就院で浄瑠璃姫六百回忌追善詩の引き札を作るなど、岡崎での真澄に関する情報は極めて少ないのが現状である。このことが岡崎での真澄研究の進展を妨げている。

かつて岡崎でも真澄研究が盛りあがった時期がある。真澄研究家の内田武志さん旧蔵の真澄に関する資料を昭和六一年に岡崎市に寄贈いただき、図書館に内田文庫が開設されたのもその真澄研究の盛り上がりのおかげのことであった。寄贈を記念して図書館で開催された講演会には、内田ハチさんほか、歴史学者の網野義彦氏を招くなど真澄に関する認識が高まった。一〇年後には真澄没後二〇〇周年となる。内田文庫の活用などにより、岡崎での真澄研究の再度の盛り上がりを目指したい。



菅江真澄シンポジウム写真 秋田